序　説

明治五年の「学制」公布による近代教育制度創始から、本年（令和四年）で百五十年目に当たる。この間に、我が国の教育は様々な課題に直面しながらも、その都度必要な諸改革を図りつつ、現在までの間に量的にもまた質的にも著しい発展を遂げ、社会の発展の基礎となってきた。

本書は、学制公布百五十年を記念し、教育のみならず科学技術・学術、文化・スポーツ等も含め、文部省・文部科学省の施策を中心に年代を追って記述することにより、我が国の教育がどのような発展の経過をたどってきたのかを明らかにし、今後の一層の進展に資することを目的としている。

昭和四十七年に「学制百年史」、平成四年に「学制百二十年史」が刊行され、学制公布以来百二十年の発展経過をまとめているので、本書の編集に当たっては、それらの成果の上に立ち、平成四年から現在までの三十年間の記述に重点を置くこととし、昭和四十六年から平成四年までの記述は学制百二十年史の内容を精選・集約することを基本方針とした。したがって、従前の状況の詳細については、両書を参照されたい。

記述に当たっては、両書の構成を踏まえ、幕末維新期から昭和二十年の終戦までを第一編とし、昭和二十年の終戦後から昭和四十六年までを第二編、昭和四十六年から平成四年三月までを第三編とした。

次いで、平成四年四月以降令和四年三月現在までを第四編とし、その間の施策の進展と新たな展開について記述し

た。この時代は、直近の昭和六十年から六十二年までの臨時教育審議会の四つの答申を受けた教育改革が推進され、平成十八年の教育基本法の改正や教育再生会議の議論、平成二十五年以降の教育再生実行会議の諸提言を踏まえ、数多くの改革が続けられた時期である。このため、第四編の第一章において教育改革の流れをまとめて概説し、その上で、第二章以下において三十年間の発展過程を詳述した。また、資料編には、最近三十年のものを中心に基本的な資料を収録した。